

生活科の動物飼育における獣医師との関わりの実践報告

～小学校の先生に教えられた子ども達との関わりかた～

大 門 由 美 子

1 久保先生との出会い

平成 14 年頃、学校で飼育されている動物の治療を福井県獣医師会が無料で行うようになってから、最初の頃に出会った先生がレオ君というモルモットを教室内飼育しておられた久保先生でした。当時久保先生は 2 年生の担任で、子ども達が 1 年生の時から教室の中でモルモットを飼育し学習しておられました。そのレオ君が体調を崩し来院してくださった時からお付き合いが始まりました。レオ君は 2 回目の入院で亡くなってしまったのですが、その間の子ども達や先生との関わりから、私は、学校は何が知りたいのか、何をしてもらいたいのか、どういう対応が正しいのかあるいはより良いのか、ひととおりの基礎のようなものを知ることができました。子ども達は、みんなでお世話しているモルモットを大人がどのように扱っているか見たい、モルモットを大切に治療して安心させてほしい、治療は実際にどんなことをしているのか知りたい、その間モルモットや獣医さんは何を感じているのか、またどんな風に死んでしまったのか、教えて欲しいと思っている、そう感じました。また先生は、動物を世話しながら過ごす毎日を通じて、子ども達に安らぎの感情を持たせ、様々な気づきや友達との関係の深まりなどを想定し、実際に体験させて学ばせたいのだ、と思いました。

2 初めての喪の授業

レオ君が死んだ時、作文を書くことで心を静めた子ども達ですが、殆どの子が「レオ君ありがとう」と感謝の言葉を書いています。お別れの授業に呼ばれて行き（その時は研究授業で他の先生方が見学してお

られました）、亡くなった理由やその時の様子を話しました。クラスに支援が必要なお子さんや、ちょっと乱暴な子もいて、自分たちの世話の仕方が悪くてレオ君が死んだのではないかと全員が不安がっていました。一人が立ち上がってそのことを私に聞いてくれた時、私はきっぱりと「違いますよ。レオ君は年を取ってしまって命がだんだんと消えていったんです。」と説明しました。そう言った瞬間に教室のみんながほっとため息をついて、空気が軽くなったのを感じました。後で久保先生から「あの質問をした子は、ちょっと乱暴な子の代わりに勇気を奮って手を挙げてくれたんですよ。」と言われました。どんなに願っても、もう二度と戻って来ない、という現実始めて直面した子ども達は 2 年生ながら既に命への畏敬の念と責任を感じているように見えました。小さな心が嵐にもまれるような体験をすることになるので、ゆっくりとしたお別れの時間（喪の授業）はとても大切で必要なものだと思います。

その後、久保先生は次のモルモットを飼育することに着手しました。子ども達に伝えてみるとはじめは「死ぬのが嫌だから飼いたくない」と言っていた子も、話し合いを重ねるうちに次第に「飼いたい」という意見に変わりました。最後まで反対していた子が例のちょっと乱暴な子で、自分のせいでレオ君が死んだのではとずっと思っていたそうです。でも、みんなで次のモルモットは長生きさせようと話し合い、飼育を決意し、名前を考えることになりました。元気くん、つよし君、など候補を挙げ意見が出て、自分の親がどんな想いで自分に名



補助で入っておられた教諭がレオ君の闘病の様子を紙芝居にしてくださいました

前をつけてくれたか、というところにまで思いが及んだ、と久保先生が教えてくださいました。

新しく大人のモルモットがやってきて、名前はクルル君と決まりました。あれ？これまでの相談していた名前は怎么样了なんでしょうかと思いましたが、モルモットを目の前にした子ども達からの希望だそうです。クルルと鳴くからがその理由。「死ね」が口癖だったあの少し乱暴な子も、もう「死ね」と言わなくなりました。久保先生がその理由を本人に尋ねたら「だって、あいつが死んだから」とポツリと言ったそうです。

3 より教育的効果のある飼育へ

その後、残念ながら久保先生は市内の別の小学校へ転任になりました。クルル君を連れての移動です。この時点で、モルモットはあくまで久保先生個人の持ち物として教室におり、もちろん管理職やほかの教諭も飼育の意義を認めておられましたが、他のクラスでも飼育しよう、とはなりません。久保先生の転任先の小学校でもクルル君は低学年の学級で暮らしていました。2年後、再び治療が必要となったため、私は久保先生やクルル君と会う機会が増えました。クルル君もレオ君同様に、やがて入院中に死んでしまうのですが、レオ君の時の経験から、お別れの授業について事前に久保先生と相談することができま

した。クルル君のお別れの授業は保護者参観日で、それまで学校飼育動物の記事を書いてくれていた福井新聞社の記者の方も参加しておられました。亡くなる直前に私が治療している様子（投薬や給餌）や、クルル君の表情などを撮影した動画を見た後、久保先生が「大門先生に何か聞きたいことはありませんか？」と言われると、直ぐに男子児童が手を挙げて立ち上がり「クルル君をお世話してくれてありがとうございます。」と言いました。私は思わず喉の奥が痛くなり涙が出そうでした。後から記者さんも「ああいった時に大人でもなかなかお礼は言えませんよね。」ととても感心していました。私は今までこれほど感謝されたように感じたことがありません。今でもその時のことを思い出すと、こみ上げてくるものがあり、頑張ろうと勇気が湧いてきます。小学2年生にやられてしまいました。クルル君のクラスの子ども達は、十分なお別れの準備をした後でしたので、みんなで歌を歌い、校庭のクスノキの根元にクルル君を埋葬しました。

久保先生の前任校の子ども達の中で、福井新聞の投稿欄に「感謝」というテーマで投稿してくれた子がいました。6年生の彼はレオ君を飼育していたクラスの児童です。「モルモットが死んでしまって悲しかったけど、命の大切さがわかった。自分の命も友だちの命も大事にしようと思った。それを教えてくれた久保先生に感謝している。」と書かれており、久保先生は、教師冥利に尽きる、と仰っていました。



クルル君一回目の入院の様子

4 獣医師の本当の仕事として



モルモット飼育モデル校

2年生のみんなとクラスメートのもこちゃん

残念ながら、久保先生は都合で福井を離れてしまわれましたが、先生と一緒に経験させていただいたことは私の力になりました。人の育ちに関わる重要な立場におられる先生方の少しでも役に立てたら、こんな

に嬉しいことはありません。

コロナ禍の今も、福井県獣医師会のモルモット飼育モデル校の先生方や子ども達は、日々モルモットのお世話をしています。私たち獣医師は、飼育開始の時、ホームステイの為の保護者説明会、国語や道徳の授業でのゲストティーチャーなどで、学校にお邪魔しています。動物を飼育していない学校からも、ふれあい授業の依頼があり、獣医師会の学校飼育動物事業委員会の中で調整しながら、一人でも多くの子ども達に生き物に触れてもらいたい、子どものその笑顔を先生方に見てもらいたい、と頑張っています。

((公社)福井県獣医師会学校飼育動物事業委員会委員長)